※ｐ３の６行目に誤記あり。2020年２月修正。

＝歴史と哲学の県立熊谷図書館＝資料案内・展示資料目録

彩の国 埼玉県

ライブ・レター

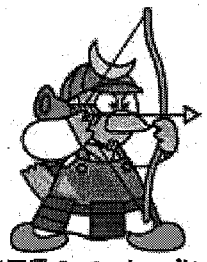
Lib. Letter

2014 Winter ［11～2月］季刊

平成26年11月29日　通巻 第38号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

https://www.lib.pref.saitama.jp/　Tel 048-523-6291



埼玉県のマスコット コバトン

室町時代後期の関東武士

期　間：平成２６年１１月２９日（土）～平成２７日２月２６日（木）

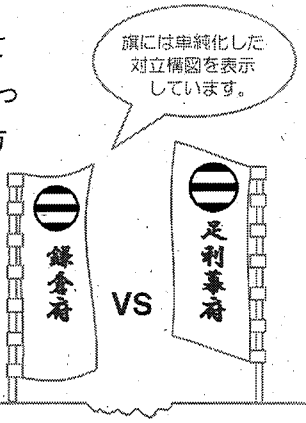
場　所：埼玉県立熊谷図書館２階ロビー

今から約550年前の室町時代後期。時はまさに戦国の世を迎えようとしていました。

幕府の権力が弱まる中、各地で守護大名による権力争いが表面化しはじめます。中央（京都）を中心に激しい戦が続き、戦国時代の幕開け「応仁の乱」へと発展していきました。

一方、関東では、「永享の乱」「享徳の乱」などが相次いで勃発。関東には中央よりも早い時期から乱世の波が押し寄せていました。

この資料展は、嵐山史跡の博物館の企画展『道灌の時代』の関連展示として開催するものです。「応仁の乱」と同時期に起きた関東の争乱、そこにかかわった主要人物に関する資料を展示します。争乱の行方をたどっていくと、敵味方が激しく入れ替わる乱世の様子が垣間見えてきます。



１．足利将軍家と鎌倉府の争い

（１）永享の乱　（永享10年　1438年）

六代将軍足利義教の時代、四代鎌倉公方には 足利持氏が就任していました。持氏は独立心が強く、関東諸国の一円領主化を狙っていました。

持氏は、四代将軍足利義持が没したとき、次期将軍の座につくことを期待したが叶わず、幕府に不満を持っていました。鎌倉公方は元服すると将軍の一字をもらい受ける慣例がありました（持氏は将軍義持の「持」の字を受けた）が、持氏は嫡子賢王丸に、あえて将軍家の通字である「義」をつけ義久

鎌倉府・鎌倉公方

幕府の中心は、京都にありました。京都から遠く離れた関東の地を支配するために作られたのが鎌倉府です。幕府の出先機関として設置され、その長は鎌倉公方（または関東公方）と呼ばれました。安定的な支配を目指し設置されたにもかかわらず、時とともに、鎌倉公方の存在自体が内乱の火種となっていきました。鎌倉府の機能は永享の乱をもって事実上崩壊しました。

と名乗らせるなど、反抗的な行動を繰り返しました。

関東管領上杉憲実は、そんな主君持氏を諌め懸命に補佐しましたが、結果的に疎まれるようになりました。「持氏に討たれるかもしれない…」と恐れを抱いた憲実は、上野に脱出。幕府に援軍を求め、幕府 VS 鎌倉府という明確な対立構図が生まれました。

有力家臣の憲実が敵側にまわったことで、持氏に太刀打ちできる力はなくなり、決定的な軍事対決に至らずに乱は鎮定。持氏は出家し、永安寺で謹慎させられました。その間、憲実は将軍義教に持氏の助命を求めましたが、聞き入れられず、持氏は嫡子義久と共に自害に追い込まれました。

永享の乱自体はあっけなく幕を閉じましたが、この乱をきっかけに関東の反幕府・反上杉諸勢力を巻き込んだ「結城合戦」が勃発するのです。

関東管領

鎌倉公方の補佐役として、関東の政治を総管する役職。任命権は将軍にありました。
1338 年、上杉憲顕が任ぜられて以降、その子孫が世襲しました。

【展示資料】

■足利持氏（四代鎌倉公方）

210.46/カ『鎌倉公方九代記・鎌倉九代後記(國史叢書)』(黒川眞道／編　崙書房　1972)

ァS210.47/ァ/『足利持氏滅亡記』(甫喜山景雄　1883)

雑　誌「歴史手帖　１９７７年２月」(名著出版)

■上杉憲実（関東管領、足利持氏の補佐役）

210.04/ミン『民衆史研究の視点』(民衆史研究会／編　三一書房　1977)

213.2/シン『人物でみる栃木の歴史』(栃木県歴史文化研究会／編　随想舎　2011)

289.1/ウエ022『上杉憲実　(人物叢書　新装版)』(田辺久子／著　吉川弘文館　1999)

S201/サ『埼玉県通史　第３巻　関東管領時代』(稲村坦元／著　歴史図書社　1978) ＊

S201/サ『埼玉県史　第４巻　関東管領時代』(埼玉県　1934)

■足利義教（室町幕府六代将軍）

210.46/クシ『籤引き将軍足利義教』(今谷明／著　講談社　2003)

210.46/ムロ『室町幕府崩壊　将軍義教の野望と挫折』(森茂暁／著　角川学芸出版　2011)

210.4/チ『中世日本の二人の主役(ライバル日本史)２』(笠原一男、下出積与編　評論社　1977)

（２）結城合戦　（永享 12 年　1440 年）

永享の乱の折、ひそかに逃亡した持氏の遺児春王丸と安王丸は、各地を転々とし、下総の結城氏朝（反幕府の考えに賛同して持氏に味方していた）にかくまわれました。

『結城合戦絵巻』　鈴木虎吉写
国会図書館デジタルコレクションより

結城氏朝は、関東管領として絶大な力を持つ上杉氏に脅威を感じていました。結城氏と同じく、幕府と上杉氏に反旗を翻そうと機会を狙う武士は少なくなく、このような諸勢力が春王丸と安王丸を擁立し、鎌倉の奪還と称して反乱を起こしたのです。

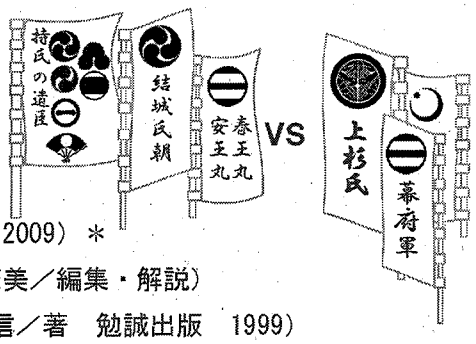
結城氏らの挙兵を知らされた幕府は、上杉憲実に再び関東政務の命を下しました。関東の諸将のほか、国人領主も加わ

国人領主

幕府に任命されて各地を支配する守護大名と違い、国人領主は地方に土着し勢力をもつ豪族、在地の武士一族のことです。

り十万ともいわれる幕府軍が形成されました。結城城は陥落し、結城氏らは討死。女装して脱出した春王丸と安王丸は憲実の手の者に捕えられ（前頁下の図）、京都へ送られる途中に斬首されました。

この乱の直後、播磨の有力守護である赤松満祐・教康父子によって、六代将軍義教は謀殺されます（嘉吉の乱　嘉吉元年 1441 年）。幕府の高まる圧力に危機感を募らせた赤松氏が「持氏討伐の祝宴を催す」と謀って館に招き、犯行に及びました。



【展示資料】

■春王丸・安王丸（足利持氏の遺児）

210.4/チュ『中世の合戦と城郭』（峰岸純夫／著　高志書院　2009）＊

D721.2/ニ『続日本の絵巻　１７　前九年合戦絵詞』（小松茂美／編集・解説）

210.47/サト『里見軍記・里見九代記・里見代々記』（稲田篤信／著　勉誠出版　1999）

210.08/ゾ『続史籍集覧　第４冊』（近藤瓶城／編　臨川書店　1984）『喜連川判鑑』を所収

288.2/カ『寛政重修諸家譜２』（続群書類従完成会　1983）＊

■結城氏朝（下総国の国人領主）

288/I75『結城氏十八代』（石島吉次／著　筑波書林　1984）

288.3/シモ『下野小山・結城一族』（七宮涬三／著　新人物往来社　2005）

288.3/シモ『下総結城氏（シリーズ中世関東武士の研究）８』（荒川善夫／編著　戎光祥出版　2012）

■結城側の諸勢力

（宇都宮等綱・小山広朝・那須資重・筑波潤朝・佐竹義憲・宍戸持里・岩松持国・桃井憲義）

288.3/ウツ『宇都宮一族』（梶村昇／著　東方出版　1992）

288.3/シモ『下野・宇都宮一族』（七宮涬三／著　新人物往来社　2006）

288.3/シモ『下野小山氏（シリーズ中世関東武士の研究）６』（松本一夫／編著　戎光祥出版　2012）

288.2/コ『小山氏の歴史』（小山弘二／著　西田書店　1992）

213.2/トウ『東国の武士たち　小山氏の生きた時代』（小山市立博物館／〔編〕　1984）

213.2/トチ/3『栃木県史　通史編３』（栃木県史編さん委員会／編集　栃木県　1984）＊

288.2/ナス『那須家資料』（舩木明夫／編集・執筆　栃木県立博物館　2003）

288.2/ケ『系図研究の基礎知識　第１巻』（近藤安太郎／著　近藤出版社　1989）＊

210.08/シ『史籍集覧 第９冊 武家部 家記編』（近藤瓶城原編 角田文衛, 五来重編 臨川書店 1967）

213.1/091『佐竹秘史　上　反逆者の系譜』（大内政之介／著　筑波書林　1987）

S204/ム『武蔵武士の研究』（福島正義／著　〔福島正義先生還暦記念事業発起人〕　1985）

288.3/セン『戦国期権力佐竹氏の研究』（佐々木倫朗／著　思文閣出版　2011）

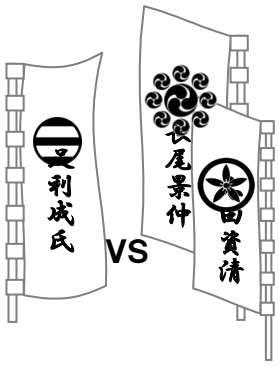
288.3/ヒタ『常陸・秋田佐竹一族』（七宮涬三／著　新人物往来社　2001）

213.1/091『山入一揆と佐竹氏』（大内政之介／著　筑波書林　1991）

213.1/イハ『茨城県史　中世編』（茨城県　1986）

210.1/ﾆ『日本の合戦　３　群雄割拠』(桑田忠親／編、桑田忠親／監修　新人物往来社　1978)
291.3/N45『新編常陸国誌　上巻』(中山信名／修　色川三中／訂　栗田寛／補　積善堂　1911)
雑　誌「史学雑誌　９６編３号」(山川出版社)
288.3/ﾆｯ『新田岩松氏(中世武士選書)　第７巻』(峰岸純夫／著　戎光祥出版　2011)
ｱ210.46/ﾜ『室町時代史』(渡辺世祐／著　創元社　1948) ＊
288.3/ﾁｭ『中世東国足利・北条氏の研究』(佐藤博信／著　岩田書院　2006)
322.14/ﾁｭ/『中世武家官位の研究』(木下聡／著　吉川弘文館　2011) 桃井憲義の記述あり＊
210.04/022『東国の社会と文化』(小笠原長和／編　梓出版社　1985)
213/ｶﾝ『関東戦国史』(千野原靖方／著　崙書房出版　2006)
210.1/ﾆ『日本城郭大系　８』(平井聖／〔ほか〕編集　新人物往来社　1980)
S204/ﾀﾝ『誕生武蔵武士』(埼玉県立歴史と民俗の博物館　2009)
213.2/ﾁｭ『中世下野の権力と社会』(荒川善夫、佐藤博信、松本一夫／編　岩田書院　2009)
288/Ko59『常陸小田氏の末裔録』(八田真知／〔原著〕、小丸俊雄／著　筑波書林　1984)
雑　誌「歴史手帖　２８」(名著出版)
■幕府側の人物（上杉憲実・上杉清方・上杉持朝・千葉胤直）
288.2/ﾁ『地方別・日本の名族　４　関東編』(オメガ社／編集　新人物往来社　1989)
288.3/ｶｽ/『上総下総千葉一族』(丸井敬司／著　新人物往来社　2000)
288.3/ﾁ『千葉氏　室町・戦国編』(千野原靖方／著　たけしま出版　1997)
288.3/ﾁﾊ『千葉氏の研究(関東武士研究叢書)　第２期第５巻』(野口実／編 名著出版　2000)

（３）江ノ島合戦　（宝徳２年　1450 年）



結城合戦で完全な勝利をおさめた幕府でしたが、その後は力を維持できませんでした。鎌倉府に対して強権者であった将軍義教が謀殺され（嘉吉の乱）、幼い嫡子が将軍職につくことになったため、幕府の権威が一気に失墜したのです。

このような時勢の中で、宝徳元年（1449 年）足利持氏の遺児の一人足利成氏が、鎌倉公方として復活。父持氏を自害に追い込んだ上杉氏を遠ざけ、持氏派だった結城氏らを重用するようになりました。

永享の乱以前の所領支配状態に戻そうと画策する成氏に、上杉氏家宰の長尾景仲・太田資清らは反発し御所を襲撃。しかし、その計画を察知した成氏に逆に反撃されてしまいました。その後、成氏は江ノ島に退避。幕府の調停で和解となりました。

この事件は、これから長きに渡って続く足利成氏と両上杉氏との争乱、有力家臣長尾・太田両氏の台頭を示すものとなりました。

両上杉氏

ここでいう両上杉氏とは山内上杉氏と扇谷上杉氏のことです。
もともと上杉氏は４つの系統（山内・犬懸・宅間・扇谷）がありましたが、争いの果てに、本家筋の山内とその庶流の扇谷が残りました。
各氏の家宰（執事）は、山内上杉氏側は長尾氏、扇谷上杉氏側は太田氏が勤めていました。太田道真・道灌親子が家宰につき活躍をみせると、扇谷上杉氏の地位は飛躍的に向上し、本家筋に匹敵する力を有するようになりました。

【展示資料】

■足利成氏（足利持氏の遺児、鎌倉公方）

210.46/コ『古河公方足利氏の研究』（佐藤博信／著　校倉書房　1989）

210.46/ア『足利成氏文書集』（佐藤博信／編著　後北条氏研究会　1976）

213.1/コカ『古河の歴史を歩く』（古河歴史シンポジウム実行委員会／編　高志書院　2012）

213.5/チ『中世東国の地域権力と社会（千葉史学叢書）２』（千葉歴史学会／編　岩田書院　1996）

■長尾景仲（山内上杉家の家宰）

288.1/ナ『長尾氏の研究（関東武士研究叢書）６』（勝守すみ／著　名著出版　1978）

■太田資清（道真（どうしん））　（扇谷（おおぎがやつ）上杉家の家宰、太田道灌の父）

288.1/マ『太田氏の研究　（関東武士研究叢書）　第３巻』（前島康彦／編著　名著出版　1975）

S204/ネ『太田氏関係文書集　第１　（郷土研究資料）　第１３輯』（練馬郷土史研究会　1963）＊

S289/オ『太田道真と道灌』（小泉功／著　幹書房　2007）

２．応仁の乱と同時期の関東争乱

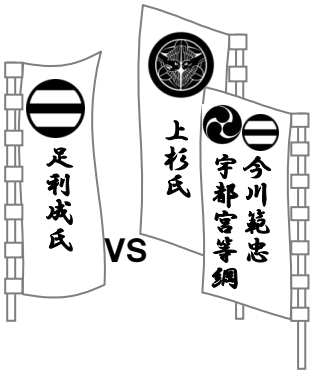
（１）享徳（きょうとく）の乱　（享徳 3 年　1454 年）

永享の乱の後、父上杉憲実と共に出家した上杉憲忠（のりただ）は、長尾景仲らの要請で還俗し、関東管領に就任。鎌倉公方足利成氏の補佐役となりました。因縁のある両者が対立するのは必至で、憲忠は謀殺されてしまいます。

関東管領を殺した成氏は幕府に反旗を翻したものとみなされ、八代将軍義政は上杉氏支援に踏み切りました。そして、今川範忠（のりただ）、宇都宮等綱（ひとつな）らに討伐の命を下しました。鎌倉を持ちこたえることができなかった成氏は、下総の古河に退き、そこを本拠とし依然として鎌倉公方としての権力を握り続け、古河公方を名乗るようになりました。

応仁の乱

「将軍家・管領家の家督争い」と「有力守護大名細川勝元と山名持豊の勢力争い」が混ざり合い、1467 年から 11 年間、京都を中心に続いた戦乱。室町幕府は、将軍と守護大名との微妙な勢力均衡の上に成り立っていましたが、この乱で京都は荒廃し、幕府の力はいよいよ衰えました。
以後約 100 年間におよぶ戦国時代が幕を開けます。



その後、分倍河原（ぶばいがわら）の戦い（享徳 4 年 1455 年）をはじめ、長尾景春の乱（文明 8 年　1476 年）など数々の乱が相次ぎました。成氏と上杉氏で関東を二分する争いをする中、幕府は新しい公方足利政知（まさとも）を関東に送り込み成氏に対抗しようとしました。しかし、幕府の権力を笠に着た政知を、関東の諸将は受け入れず、鎌倉に入ることさえできませんでした。結果、鎌倉の手前の伊豆堀越にとどまることになり、堀越（ほりごし）公方を称することになりました。

享徳の乱は約３０年続き、中央では応仁の乱が発生していました。

【展示資料】

■足利成氏（古河公方）

210.4/ﾁｭ『中世東国の政治構造　上』（佐藤博信／編　岩田書院　2007）

210.4/ﾕﾔ『湯山学中世史論集　２　三浦氏・後北条氏の研究』（湯山学／著　岩田書院 2009）

210.4/ﾄｳ『動乱の東国史　６　古河公方と伊勢宗瑞』（吉川弘文館　2013）

ｱ213.1/ｺ『古河公方関東戦国史』（菅谷武一／著　菅谷武一　1981）

S204/ｺ『古河公方文書展』（埼玉県立文書館　1988）

210.47/ｾﾝ『戦國遺文　古河公方編』（佐藤博信／編　東京堂出版　2006）

■今川範忠（駿河の守護大名）

288.3/ｲﾏ『今川氏の研究（小和田哲男著作集）　第１巻』（小和田哲男／著　清文堂出版　2000）

215.4/ｼｽ/『静岡県史　通史編２　中世』（静岡県　1997）

■宇都宮等綱（宇都宮城主）

288.3/ｼﾓ『下野宇都宮氏（シリーズ中世関東武士の研究）４』（江田郁夫／編著　戎光祥出版　2011）

210.1/ﾙ『類聚伝記大日本史５　武将篇』（雄山閣出版　1981）

■足利政知（堀越公方）

210.4/ﾕﾔ『湯山学中世史論集４　鎌倉府の研究』（湯山学／著　岩田書院　2011）

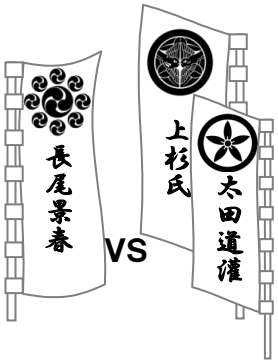
213.4/ﾁ『秩父地方史研究必携１』（埼玉新聞社　1979）

210.46/ﾑﾛ『室町幕府の東国政策』（杉山一弥／著　思文閣出版　2014）

乱世の武士の特徴
～宇都宮等綱の例～

宇都宮等綱は、結城合戦および江ノ島合戦では、鎌倉公方に従って、幕府側と交戦し名を挙げました。しかし、享徳の乱では、一転して幕府側につき、成氏の鎌倉追放に貢献しました。等綱の父持綱が、成氏の父持氏と対立して命を落としたため、寝返ったといわれています。敵味方が入れ替わるこの時代の武士の様子が表れています。

（２）長尾景春の乱（文明 8 年　1476 年）



上杉顕定の家臣 長尾景春は、自分を家宰に選ばなかったことに不満をもち反乱を起こしました。景春は関東の諸将らを多々味方につけ、五十子陣（足利成氏との対決に備え山内上杉軍が駐留していた。現在の本庄市にあった）を包囲。陣は崩壊し、顕定は上野に逃げました。このとき、扇谷上杉氏の主力を率いる太田道灌らは今川氏の家督争いの仲裁のために不在でした。

その後、景春は上杉氏と対立する古河公方成氏と手を組み、関東各地で争いを繰り返しました。しかし、それらの反乱は相次いで道灌に鎮圧され、約４年後に乱は終息しました。

もともと家宰の地位をめぐる争いでしたが、次第に戦局は両上杉氏の対立へと変容していきました。

【展示資料】

■長尾景春（山内上杉氏の家臣）

289.1/ﾅｶ391『長尾景春(シリーズ中世関東武士の研究)１』(黒田基樹編著　戎光祥出版　2010)

S204/ﾅ『武蔵鉢形城』(中里清著　埼玉県立熊谷図書館製作　19--) ＊

雑　誌「埼玉地方史　１４号」(埼玉県地方史研究会)

■太田道灌（扇谷上杉氏家宰、上杉定正の補佐役）

S080/ｻ『埼玉叢書　第４巻』(稲村坦元編　国書刊行会)「太田道灌状」を所収

ｲS289/ｵ『太田道灌公』(東京市　1936)

ｲ213.7/ﾅ『太田道淮公古文書』

S289/ｵｵ『〈図説〉太田道灌』(黒田基樹／著　戎光祥出版　2009) ＊

3. 中世の英傑　太田道灌

道灌は中世における有名な武将の一人ですが、「江戸築城」「文武兼備の武将」「山吹の里のエピソード」の他は、どのような活躍をした人物なのか意外と知られていません。しかし、享徳の乱以降の関東の争乱の鎮静化にはほとんど道灌がかかわっており、この時代は道灌の働きなしに語れません。作家堂門冬二は『小説太田道灌』の序文で「よほどの歴史好きでも、何となく敬遠する時代がある。南北朝時代と戦国時代（室町末期）だ。なぜ敬遠するのかといえば、つぎのような理由からではないかと思う。事件全体の流れがスッキリしない。対立はあるがどっちが善玉か悪玉か、はっきりしない。登場人物が多すぎる。そして、対立するトップへのからみ方が複雑。（中略）結末がモヤモヤと不透明に終わる」と語っています。道灌の活躍があまり知られていないのは、こういったところにあるのかもしれません。

１４８７年、道灌は５５歳で主君定正に謀殺され世を去ります。乱世に生きながらも私欲をもたず、一生を同じ主に仕えました。忠義を尽くしたにも関わらず主によって討たれた道灌は、不遇の武将として後世の人々の人気を集め、江戸期には道灌の名に託していくつもの著述が残されました。それらは、道灌の断片を伝える貴重な史料となっています。

道灌の死後、北条早雲（そううん）の時代が到来します。一家臣として一生を終えた道灌と、下剋上で大名にまで上り詰めた早雲は、いみじくも同い年でした。両者の生き方はよく比較して語られます。

【展示資料】

（１）軍略

S080/ｻ『埼玉叢書　第４巻』(稲村坦元編　国書刊行会)『太田家譜（かふ）』を所収

S289/ｵ『日本の武将　第２６　太田道淮』(勝守すみ著　人物往来社　1966)

082/ﾁ/『中国古典新書続編　１９　尉繚子』(萩庭勇／著　明徳出版社　1994)

082/ﾁ/『中国古典新書〔９１〕　六韜・三略』(宇野精一／編　明徳出版社　1979)

122/ﾁ『中国の思想　第１０巻　孫子』(徳間書店　1973)

399/H51『兵法全集　第４巻　司馬法』(中央公論社　公田連太郎／訳　1936)

（２）和歌

081/ｺ『定本常山紀談』上・下（湯浅常山／著　新人物往来社　1979）

081.6/ﾜ『渡辺刀水集４　（日本書誌学大系）４７－４』（渡辺金造著　青裳堂書店　1989）＊

188.82/ﾊﾝ『万里集九（人物叢書　新装版）』（中川徳之助著　吉川弘文館　1997）

210.4/ﾌｼ『武士はなぜ歌を詠むか』（小川剛生著　角川学芸出版　2008）

S940/ｵ『太田道灌「山吹の里」考』（藤井善男著　望月印刷　1995）

（３）江戸築城・町づくり

081/I94『燕石十種　第６巻』（岩本活東子／〔編〕　中央公論社　1980）＊

210.46/ﾑ『室町戦国の社会　商業・貨幣・交通』（永原慶二著　吉川弘文館　1992）＊

213/ｶ『関八州古戦録』（槙島昭武／〔原著〕　中丸和伯／校注　新人物往来社　1976）

213.6/ｴ『江戸と江戸城（ＳＤ選書）　４』（内藤昌／著　鹿島出版会　1980）

213.6/ｴ『江戸と江戸城　家康入城まで』（鈴木理生／著　新人物往来社　1975）

213.6/ﾄｳ『東京市史稿　皇城篇　第１』（東京都／編　臨川書店　1973）

213.6/To46『東京市史稿　市街編　第二』（東京市／編纂　臨川書店　1993）＊

213.6/To46『東京百年史１　江戸の生誕と発展』（東京百年史編集委員会／編 東京都 1973）＊

213.61/ﾁﾖ『千代田区の歴史』（鈴木理生／文　名著出版　1978）

521.5/ﾀ/『江戸　失われた都市空間を読む』（玉井哲雄／著　平凡社　1986）

518.8/『江戸の都市計画』（童門冬二／著　文藝春秋　1999）

919.4/ｲ『梅花無尽蔵注釈４』（市木武雄／著 続群書類従完成会　1994）『静勝軒銘詩并序』を所収

雑　誌「歴史研究　１９８５年６月」（歴研）

雑　誌「歴史研究　２００７年１０月」（歴研）

雑　誌「東京人　２０１０年９月」（都市出版）

S289/ｵ『太田道灌』（桜井一義／著　明治書院　1897）『左金吾源大天江亭記』を所収＊

『長禄江戸図』
（太田時利　米田万右衛門　1857）
国会図書館デジタルコレクションより

太田道灌が江戸城を築いた頃の長禄年間（1457～1460）の江戸の様子を描いたとされる図です。
川や丘など、自然の地形を活かせる場所を選んで築城したことがわかります。こうした工夫で、合戦を有利に運びました。

（４）人物像

210.47/『戦国武将の手紙を読む』（角川書店　二木謙一／著　1991）

281/ｵ『名将言行録　上』（岡谷繁実／原著　教育社　1980）

281/ﾆﾎ『日本英雄伝　第２巻（ウーオ）』（日本英雄傳編纂所／著　非凡閣　1936）

281/ﾌﾞ『武将名言１００話』（桑田忠親／監修　立風書房　1983）

281.04/ｸ『武将の名書簡』（桑田忠親／著　東京堂出版　1968）

913.6/ﾄﾞ『小説太田道灌』（童門冬二著　読売新聞社　1987）

289.1/081『少年太田道潅伝』（鴇田恵吉／著　大同館　1937）＊

ｲS289/ｵ『禪者としての太田道潅』（高崎直承／［著］　鴻盟社　1956）

S280/ﾑ『武蔵武将伝』（稲垣史生著　歴史図書社　1980）

雑　誌「歴史研究１９８６年８月」太田道灌の謎（歴研）

（５）家臣

■斉藤加賀守　121/ﾆ『日本思想史講座２　中世の思想』（古川哲史ほか編　雄山閣出版　1976）p94

■佐藤五郎兵衛・桂縫殿助 213.5/ﾁ『房総における戦国武将の系譜』（千野原靖方著 崙書房 1976）p23

■樋口兼信　S289/ｵ『日本の武将　第 26　太田道潅』（勝守すみ著　人物往来社　1966）p129

■日暮里玄蕃　S222/ﾄ『所沢市史　地誌』（所沢市　1980）p572＊

■金子掃部助の子・市川亀鶴丸・三留兄弟・満五郎

210.4/ﾕﾔ『湯山学中世史論集　１』（湯山学著　岩田書院　2009）p182、p185-206

■木戸孝範　213.4/ｻ『埼玉県の歴史』（小野文雄著　山川出版社 1979）ｐ105

（６）道灌の著述として伝わる資料

『花月百首』…… 081/ｿﾞ『続群書類従 第 14 輯下』（続群書類従完成会 1958）に所収される歌集

『慕景集』…… R911.1/ｼ『新編国歌大観４』（角川書店　1986）に所収される歌集＊

『異本慕景集』… R911.1/ｼ『新編国歌大観８』（角川書店　1990）に所収される歌集＊

『平安紀行』…… ｲ081/ｸﾞ『群書類従　第 18 輯』（経済雑誌社　1904）に所収される紀行文

『京進和歌』…　翻刻されていない歌集（原蔵者：水府明徳会彰考館（茨城県水戸市）
写真所蔵：東京大学史料編纂所）

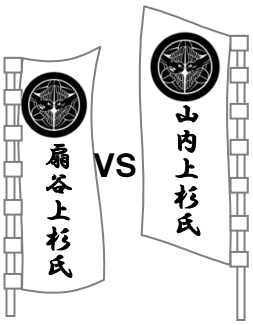
『砕玉類題』……『梅花無尽蔵』に全１１巻の家集と記録されているが、現存していません。

『我宿草』…… 別名『太田道灌自記』『太田道灌随筆』『道灌撰集』と呼ばれる随筆
『我宿草』は埼玉県立図書館デジタルライブラリーでご覧いただけます↓。
（https://www.lib.pref.saitama.jp/stplib_doc/data/d_conts/kicho/syosai/052.html）

『太田道灌兵書』… 内閣文庫で所蔵。これは江戸時代のもので、明らかな偽書とされていますが、
道灌が軍略の達人と捉えられていたことが伺われます。

※時代と合わない記述があるなどの理由で、ほとんどが後世の人が記したものと考えられています。
真偽のほどは不明です。

展示参考資料：「文学　９巻３号」（岩波書店）、『日本の武将　第２６　太田道潅』（人物往来社）



4. 時は戦国時代へ

（1） 長享（ちょうきょう）の乱　（長享元年 1487 年）

道灌の活躍によって、扇谷上杉氏は本家筋山内上杉氏をも凌ぐ勢力に成長しました。この事態を恐れたのが山内上杉顕定（あきさだ）でした。顕定は山内上杉家の面目を保つため、扇谷上杉定正（さだまさ）を補佐する道灌を遠ざけようと画策します。結果、扇谷上杉定正は、道灌を相模国糟屋（かすや）の館に招き、家臣に命じて入浴中を襲わせ殺害しました（1486 年）。「当方滅亡（自分が死ねば上杉氏の繁栄はない）」と無念の叫びをあげてこと切れたと伝えられています。実際、この後、同族の争いの果てに、上杉氏の勢力は大きく後退します。そして、北条早雲（そうううん）が関東進出に乗り出すのです。

【展示資料】

210.4/ﾕﾔ『湯山学中世史論集　１　関東上杉氏の研究』（湯山学著　岩田書院　2009）
210.47/ｺﾎ『後北条氏と領国経営』（佐脇栄智／著　吉川弘文館　2007）
288.3/ｵｳ『扇谷上杉氏　（シリーズ中世関東武士の研究）５』（黒田基樹編著　戎光祥出版　2012）
288.3/ｶﾝ『関東管領上杉氏（シリーズ中世関東武士の研究）１１』（黒田基樹編著 戎光祥出版　2013）
288.3/ｾﾝ『戦国期山内上杉氏の研究（中世史研究叢書）２４』（黒田基樹著　岩田書院　2013）
S204/ﾘﾖ『両上杉の争い　追録』（平井辰雄／編　羽生市古文書に親しむ会　2009）
S288.1/ｶﾝ『関東管領・上杉一族』（七宮滓三／著　新人物往来社　2002）＊
S288.2/ﾁ『地方別・日本の名族　４　関東編』（オメガ社／編集　新人物往来社　1989）

（2）戦国武将のさきがけ　北条早雲（そうううん）

後北条氏（ごほうじょうし）
鎌倉時代に執権をつとめた北条氏と区別するための名称です。
初代の早雲の出自は諸説あり、定かではありませんが、鎌倉時代の北条氏との血縁関係はありません。
小田原北条氏とも呼ばれる一族です。

享徳の乱で両上杉氏の基盤が揺らいだ隙に勢力を拡大したのが後北条氏の祖「北条早雲」です。出家前は「伊勢新九郎盛時（いせしんくろうもりとき）」、出家後は「早雲庵宗瑞（そうううんあんそうずい）」と名のりました。

駿河（するが）の守護大名今川義忠（よしただ）のもとで手腕を発揮し頭角を現しました。今川家の内紛を収める（太田道灌とともに調停を進め成功させた）などの功績をあげ、一家臣から興国寺城の城主となりました。

その後、実力で伊豆を奪い取り、ついには関東の覇権を握ったことで、戦国大名の典型、元祖下剋上の武将などと言われます。

小田原を本拠として伊豆を支配し、関東一円を支配する後北条氏五代の基礎をつくりました。

【展示資料】

210.1/ﾆﾎ『日本人物史大系　第２巻　中世』(朝倉書店　1959)
210.4/ｺ『小田原北条記』上・下（江西逸志子／原著　教育社　1980)
210.47/ﾎｳ『北条早雲と家臣団』(下山治久／著　有隣堂　1999)
288.3/ｾﾝ『戦国北条氏五代の盛衰』(下山治久／著　東京堂出版 2014)
288.3/ｾﾝ『戦国北条氏五代(中世武士選書)８』
(黒田基樹／著　戎光祥出版　2012)
288.3/ﾎｳ『北条氏年表』(黒田基樹／編　高志書院　2003)
288.3/ﾎ『北条早雲とその子孫』(小和田哲男／著　聖文社　1990)
289.1/ﾎ『北条早雲のすべて』(杉山博／編　新人物往来社　1984)
289.1/ﾎ『北条早雲　物語と史蹟をたずねて』
(土橋治重／著　成美堂出版　1984)
289.1/ﾎｳ002『伊勢宗瑞(シリーズ中世関東武士の研究)１０』(黒田基樹／編著　戎光祥出版　2013)
BM289/ｾ『戦国の名将北条早雲発掘』(島武史／著　東洋経済新報社 1998)
ｱ289.1/ﾎ『北条早雲　素生考』(立木望隆／著　郷土文化研究所　1971)
S204/ﾎｳ『北条早雲とその一族』(黒田基樹／著　新人物往来社　2007) ＊
S230/ｺﾎ『後北条氏の城　合戦と支配』(博物館周辺文化財の複合的活用事業実行委員会　2008) ＊
B/ｻ『北条早雲　１　(文春文庫)　』(早乙女貢／著　文芸春秋　1980)
雑　誌「歴史研究　２００３年２月」後北条一族の謎（歴研）
雑　誌「歴史研究　１９９０年７月」北条早雲の謎（歴研）
雑　誌「歴史読本　１９８０年１０月」戦国の梟雄北条早雲（KADOKAWA）

御由緒家（ごゆいしょけ）

北条早雲は苦労をともにした同士に「一人でも大名になったなら、残りの者は、その家臣となって大名になった者を盛り立てよう」と約束しました。その六人（大道寺太郎・多目権平（ためごんべい）・荒川又次郎・荒木兵庫・山中才四郎（さいしろう）・在竹兵衛（ありたけひょうえ））は忠誠心の厚い家老となって北条氏を支え、北条一族に次ぐ家格の「御由緒家」として重用されました。

【その他　関連資料】

■室町時代後期の関東の情勢がわかる資料など

210.08/ｼ『史籍集覧　第１６冊　武家部　戦記編』(臨川書店　1967)『永享記』所収
210.08/ｼ/『史籍集覧　第６冊　武家部　年代記編』(臨川書店　1967)『鎌倉大草紙』所収
210.4/ｶﾝ『関東足利氏と東国社会』(佐藤博信／編　岩田書院　2012)
210.4/ｾ『戦乱と一揆』(上島有／著　講談社　1976) ＊
210.4/ﾄｳ『動乱の東国史　５　鎌倉府と室町幕府』(吉川弘文館　2013)
213.4/Sa24『埼玉県史　通史編２』(埼玉県　1988) ＊
210.4/W46『関東中心足利時代之研究』(渡辺世祐／著　雄山閣　1926) ＊
210.45/ｶﾏ『鎌倉府体制と東国』(小国浩寿／著　吉川弘文館　2001)
210.46/ｶ『鎌倉府と関東(歴史科学叢書)』(山田邦明／著　校倉書房　1995)
210.46/ﾑ『室町幕府解体過程の研究』(今谷明／著　岩波書店　1985)
210.46/ﾑﾛ『室町幕府と守護権力』(川岡勉／著　吉川弘文館　2002) ＊
210.47/ｲ『関東合戦記』(伊礼正雄／著　新人物往来社　1974)
213/ｶﾝ『関東戦国の大乱　享徳の乱、東国の３０年戦争』(群馬県立歴史博物館　2011)
213/ｷﾀ『北関東の戦国時代』(江田郁夫／編、簗瀬大輔／編　高志書院　2013)
213/ｼﾂ『実像の中世武士段』(高橋修／著　高志書院　2010)
288.3/ｻｶ/『相模三浦一族とその周辺史』(鈴木かほる／著　新人物往来社　2007)
S204/『北関東中心享徳文明の乱年譜』(冨田勝治／編　関東史料研究会　1976)

【関係家紋一覧】

家紋	家名	家紋	家名
二つ引き	足利氏 今川氏	佐竹扇	佐竹氏（常陸）
上杉笹（うえすぎざさ）	上杉氏	一文字	那須氏（下野）
九曜巴（くようどもえ）	長尾氏（上野）	州浜（すはま）	宍戸氏（常陸）
太田桔梗（ききょう）	太田氏（武蔵）	大中黒（おおなかくろ）	岩松氏（上野）
左三つ巴（ひだりみつどもえ）	結城氏（下総） 宇都宮氏（下野）	月星（つきぼし）	千葉氏（下総）
左二つ巴（ひだりふたつどもえ）	小山氏（下野）	三つ鱗（みつうろこ）	後北条氏（相模）

※説明文等について

展示資料のほか、『国史大辞典』（吉川弘文館）、『戦国武将合戦事典』（吉川弘文館）等の事典類、『太田道灌』（太田道灌公事蹟顕彰会）等を参考にまとめたものです。

※展示資料とリストについて

（１）このリストに掲載されている県立図書館資料は、展示期間中、貸出ができません。貸出は展示終了後から行います。予約、複写は可能ですので、カウンターの職員にお尋ねください。なお、雑誌のバックナンバーや特殊文庫など一部貸出できないものがあります。

（２）リストの表記方法は以下のとおりです。

図書：[請求記号]『書名』（著者名　出版者　出版年）

雑誌：「誌名　巻号」（出版者）

（３）＊印の資料は県立浦和図書館埼玉資料室所蔵資料（禁帯出）のため、ご紹介のみで展示はしていません。また展示スペースの都合で、展示していない資料についても＊印がついています。

今回の資料展示は、以下の企画展と連携して実施しています。

■企画展「道灌の時代　～戦国時代は関東から始まった～」

■主催・会場　埼玉県立嵐山史跡の博物館

埼玉県比企郡嵐山町菅谷７５７　TEL 0493-62-5896

■会期　平成２６年１２月６日（土）～平成２７年２月２２日（日）

嵐山史跡の博物館では太田道灌ゆかりの軍配も初公開されます。
博物館へも、ぜひご来館ください。

彩の国さいたま